

# 中国・厦門大学図書館所蔵「末次資料」について

華 立

中国・厦門大学図書館には、「末次資料」と称される、戦前から戦中期（1913年～1940）にかけて日本人によって作成された新聞切り抜き資料集がある。題名の「末次」は貼付専用台紙に印字された「末次研究所」に由来するが、それが当該資料の作成に中心的役割を果たした人物、末次政太郎のことでありと判明している。切抜帳は全部で755冊あり、B4サイズで製本され、高さ2メートルの書架6連半も占めるほど、海外に現存するその時代の新聞切抜コレクションとしては稀にみる大部のものとなるのだが、日本国内ではその資料の存在すら知る人が少ない。

「末次資料」は厦門大学図書館にその原本が所蔵されているほか、1997年、『中華民国史料外編—前日本末次研究所情報資料』（以下『外編』と略す）と題した同資料の影印本（複製本）が広西師範大学出版社から刊行されている。しかし影印本は出版にあたり、原本の構成を一部変更して編集した（その詳細は後述する）ため、前者の忠実な再現とはいえない。

筆者は昨夏以来、厦門大学図書館を二度訪問して原本を調査した。本稿はその見聞をまとめたものである。ただし、当資料の膨大さに対して筆者の滞在期間は短く、収集できた情報の量も限られている。それがゆえに本稿は、本格的な史料分析ではなく、当資料の成り立ちやその構成の概要を中心にした紹介に甘んじざるをえない。それに加えて、影印本『外編』と原本との相違点についても触れておきたい。いまなお日本国内における当資料に関する書誌的情報が乏しい状況にあって、この紹介文が当資料の研究・利用の一助になれば幸いである。

## 一、末次政太郎と「末次資料」の成り立ち

厦門大学図書館の説明によれば、末次研究所は当時北平（即ち北京）市内の「東城棲鳳楼七号」にあったという。民国期北京の地図に照らして、東単交差点の東北角に位置する「棲鳳楼胡同」が該当すると思われる。ただし同地は現在、都市開発により路地全体が取り壊されており、その跡を辿ることはもはや不可能になっている。

一方、資料作成者の末次政太郎については、中国での調査では人名以外に情報がなかったが、東京の外務省外交史料館で調査したところ、いくつかの手がかりをえた。

まずは彼の出身地と職業について。大正十二年（1923年）北京駐在公使芳澤謙吉が本省にあてた書簡<sup>①</sup>によれば、末次政太郎は福岡県の出身で、大正初期に福岡日日新聞の特派員として来華し、大正十二年の時点で彼の北京滞在はすでに十年の長きに及んでいたという。逆算すれば、末次の北京入りはおそらく大正二年の頃にさかのぼるのであろう。この点に関しては新聞切抜の日付からも裏付けられる。「末次資料」のなかで時期がもっとも早い切抜は1913年3月のものとなっている。少なくともその時点で彼は北京に滞在していたと考えてよからう。

北京滞在中の末次政太郎は、前記の新聞社の仕事に携わりながら、日中両国の交渉にも多大な関心を寄せ、積極的に関与しようとした。その一例として大正八年（1919年）、北京政府教育部の次官から申し出された対日教育借款の要望を受けて、彼が斡旋役としてその話を九州製鋼所の関係者に持ちかけていたことが、「外務省記録」の文書でわかる<sup>②</sup>。また彼と大物軍閥呉佩孚との間にも一定の連絡があったと伝えられている。そもそも大正八年頃から日本当局は、国際的に孤立感が強まったことから、対外宣伝の強化による自国イメージの改善を目論み、その方針のもとで、外務省では新聞関係の海外通信員の補強が行われていた。末次はそれをチャンスと捉え、知人である北日本汽船社長の末永一三を通じて外務省に働きかけた結果、大正十二年十二月、北京駐在の海外通信員に採用された<sup>③</sup>。当該資料の名称の由来である「末次研究所」がいつ成立

したか、また末次以外にも構成員はいたのか、などの点については、いまのところまだはっきりしないが、「末次資料」そのものは1920年代後半から採録量が増え、用紙の体裁と作成手順も整備されてきたことをみれば、外務省採用を契機にその切抜事業も一気に本格化したと思われる。

では、北平で作成された「末次資料」はいつ、どのようにして厦門大学図書館の所蔵になったか？中国での調査によれば次のような経緯を辿ったと思われる<sup>④</sup>。

1945年日本敗戦後、「末次資料」は国民党政府に接收され、南京の国防部史政局で保管されるようになった。しかし1949年、共産党に敗れた国民党は大陸からの撤退を余儀なくされた。その際、機密類資料に属す「末次資料」が福建経由で台湾へ運ぶよう命じられた。だが資料が福州に到着したのち、その情報をキャッチした共産党人は資料搬送の責任者呉石氏（前史政局長官、当時では福建省綏靖署主任）に接触して、当資料を福州に留めておくように説得につとめ、ついにそれに成功した。呉石本人は台湾へ渡ったが、共産党との関係が発覚し、一年後に処刑された。彼がいわば命がけで福州に残した「末次資料」はまもなく厦門大学図書館に移管された。ちなみに当資料獲得に尽力した共産党の関係者のなかには、当時の福建省研究院社会科学研究所長章振乾氏、同所歴史組教授、のち厦門大学教授の傅衣凌氏らが含まれていた。前掲「北平東城樓鳳樓七号」の研究所所在地名と末次政太郎の人物名も、上記の関係者が厦門大学図書館にもたらした情報であるという。

## 二、資料の構成と標題

755冊と大部になる「末次資料」は、事項（カテゴリ）別に分類され、同一項目内の記事は時系列に並べられている。ひとつのカテゴリに含まれる切抜帳の冊数には大きなばらつきがある。少ないものでは一冊から数冊までだが、数十冊、さらには百冊を超える膨大なカテゴリもある。また、資料の全体的構成を示す総目録にあたるものがないため、検索に不便が否めないが、その場合、各切抜帳の背表紙に付された標題（＝タイトル）を手がかりとすれば、その全

容が掴みやすくなる。ただし現行の標題についていくつか留意すべき点があるので、まずはその説明を行っておきたい。

1. 各切抜帳現在の表紙（カバー）は末次研究所当時のものではなく、厦門大学図書館に入蔵されたあとに付けられたものである。そうした表紙の新調とともに、背表紙の標題もすべて中国語に書き改められている。製本の裏表紙に本来の日本語標題が一部残っているものもあるが、少数にとどまっている。

2. 標題の書き替えは複数のスタッフの手によったと思われる。筆跡の違いだけではなく、簡体字と繁体字の混用も目立つ。さらに、翻訳の基準も十分に統一されておらず、その結果、同一日本語に対する中国語の訳が多様である、という現象が起きている。

3. イデオロギーもしくは日中両国の政治的立場の相違による中国語訳への影響も明らかである。たとえば「満州事変」を「九一八事変」に、「満州国」を「偽満」に、「日支戦争」を「侵華戦争」に、「排日」を「抗日運動」に書き改めるなど、中国人読者を意識した語句の修正（すべてを修正したわけではないが）がみられる。その意味において、現行の標題は日本語の直訳ではなかった、という点にも注意が必要であろう。

筆者は現行の標題に基づいて分類項目の概要を整理してみた（表一を参照）。それを見れば、「末次資料」は内容上、おおむね二つに大別される。

その一つは、1910年代から1940年代までの中国情勢に関する、いわゆる「中国問題」を軸とした部分である。この部分は、北京政府と軍閥混戦期、北伐戦争期、南京国民政府期といった時代の推移に沿って、カテゴリが設けられている。各時期の政治動向に重点が置かれたとみられるが、同時に、経済・対外関係・軍事・文化教育・社会生活などの分野に関連する報道・論説も豊富に収集されたため、記事の内容は非常に多彩である。

もう一つは、20世紀初頭の日中外交交渉から、次第に戦争状態へとエスカレートした日中関係について、つまり「日中問題」を軸とした部分である。この部分においては、戦前の日中外交、満州事変とその後の東北地方、華北事件と華北情勢、蘆溝橋事変、日中戦争各段階の戦況、戦時日本を取り巻く国際環境や日本の外交・経済事情などをめぐるカテゴリが設けられている。分量としては、

百冊を超える「中日戦争」が最大のカテゴリで、資料全体のおよそ七分の一を占めている。

さらに、原本を点検したところ、当資料に総目録というものはなかったが、切抜帳ごとに対応する目次（＝索引）が存在していたことが判明した（すべての切抜帳にそれが作成されていたどうかは不明だが、少なくとも一部の切抜帳にはそれが存在していた）。ただしこの種の目次は、当該切抜帳と一体化していたものと、「目次別冊」すなわち別冊となっていたものといったように、二つのタイプに分かれる。前者については筆者の調査でも確認されたが、後者の「別冊」目次については、現存の資料集の中には残っていない。いつ、どこで資料本体と逸れてしまったかも不明である。図書館スタッフに尋ねて見たが、心当たりはないようであった。

表一 「末次資料」分類項目一覧表

「中国問題」の部			
区 分	標 題		冊数
◆ 北京政府の内政と外交	北京政府／北京政府拾遺／北京内閣雜件		3
	北京通訊		1
	袁世凱的帝制及其時代		5
	段祺瑞政府／段祺瑞執政下の時局		3
	曹錕賄選和就任總統後の政局		2
	中国政治和外交／中国外交與内政		4
	清帝室被逐出京		1
	羅文乾被告案		1
	中国對外經濟關係／中国的内外政情／中国政治和外交		10
	中華民國初期的財政		1
	中国政府内外債務／西原借款・煙酒借款／德法債票的糾紛・		
	支付蘇法債票的糾紛		4
	對德和約與山東青島問題／對比等國條約的修改		2
	帝國主義對華的經濟侵略／外國在華的各種產業		2
	新借款團成立		1
	治外法權問題		5
	金法郎事件		1
	各國庚款問題		2
	道清銀行之整理		2
	中華匯業銀行倒閉		1
	鐵路／交通鐵路／鐵路公管問題／滄石鐵路借款問題		4

	排外與人民反基督教活動	1
	沙面衝突後の広東／港粵罷工	3
	臨城事件	1
	招商局工作	1
◆ 軍閥混戦	直奉戦争與議和運動	1
	第二次直奉戦争	3
	第二次直奉戦争後の江西省	1
	第三次直奉戦争	3
	粵桂軍閥内戦	1
	孫伝芳入福建沈鴻英入粵・海軍北帰事件	1
	熊克武侵入湖北唐繼堯侵入広西／孫岳入陝西	2
	広東政況	3
	孫中山和外交団の衝突	1
	孫中山奉安	1
	国民軍和反国民軍の対抗／国民軍和反国民軍の対戦／国民軍和反国民軍の対戦及其時代	10
	郭松齡倒戈事件／郭軍敗滅後の時局・段祺瑞下野問題	2
	国民軍戦事	2
	河南争奪戦	1
	呉佩孚張作霖會議	1
	軍火運輸問題	1
	奉系对馮軍の謀画・直魯聯軍和奉軍の対抗	1
	直魯孫聯軍和国民党軍の角逐	1
	直魯豫聯軍の末路	1
	中国軍閥の混戦和国民軍	1
	通化大刀会暴動事件	1
◆ 国民革命軍の北伐	北伐軍の北伐及其時代	11
	北伐軍事情	2
	軍閥動向	1
	安徽江蘇南北兩軍の対抗	3
	国民革命軍與奉軍の対抗	1
	在河南の馮玉祥	1
	奉軍退出河南後形勢與南北妥協／奉軍退出河南後兩軍の対抗	2
	国民革命軍北進の挫折	1
	奉天山西兩派の決裂	1
	津浦線上的孫伝芳和国民党軍の戦争・奉晋兩軍の戦事／京漢津浦兩線南北軍の対抗	3
	各地軍閥與国民党人物誌／中国人物誌	2

	漢口租界事件／長江一帶對日事件／漢口九江英國租界歸還事件	4
	北伐勝利結束及平津一帶情況	1
	平津的國民黨黨部	1
	國民政府的政治動態	1
	國民黨軍事委員會成立	1
	國民政府左右派的內訌／寧漢兩派的軋轢／寧漢破裂和寧奉妥協的交涉	5
	唐生智和國民政府的衝突／第二期北伐準備和唐生智勢力的驅除	3
	國民黨政府的北伐・北伐軍北上	1
	蔣介石復戰後的南北對抗	1
	張作霖被爆記載・東三省形勢和對南方的妥協	1
	奉軍撤退後的北京／奉軍撤退後北京的四巨頭會議	2
	裁軍會議／軍隊編遣	2
	東三省狀況／東三省事情	2
	東三省和國民政府／東三省與南京國民政府	3
◆ 南京國民政府期	國民政府憲法草案	1
	國民黨的政治與經濟的理論	1
	國民黨會議	3
	第三次全國代表大會／第四屆第四五六次中全會會議／第五次執監大會／九一八事變後國民政府的各次會議	4
	西山會議	1
	國民政府經濟建設委員會	1
	全國財政經濟會議／南京政府的財政	4
	南京政府沒收私產	1
	南京政況	3
	關於國民政府的雜事	1
	地方行政	5
	廣東省事情拾遺	1
	民國十三年拾遺	1
	民國十六年拾遺	1
	民國十七年概觀	1
	民國十八年拾遺	1
	民國十八十九年拾遺	1
	民國大事記	1
	國民政府收回利權運動	1
	國民政府對外交涉事件	1
	對外貿易	3
	中外雜事	1
	國民政府的綿麥借款	1

	国民政府の幣制改革／中国金融／銀問題	7
	国民政府改定税制問題／国民党的税制自主運動／税制政策／改定関税率和废除厘金	7
	西南與国民政府／南京派與広西派の衝突與妥協	29
	蒋介石與馮玉祥の衝突／蒋介石與閻錫山馮玉祥の衝突	21
	監禁胡漢民和両広の独立／両広独立和北方的反蔣運動／石友三の挙兵	5
	韓復榘和劉齡年の衝突	1
	四川省の内争／四川政局／劉湘和劉文輝の内訌	3
	蒋介石提唱新生活運動	1
	張学良回国和東北軍	1
◆ 共産党・国共關係	共産党事情／共産党事件	12
	剿共	2
	共産党軍／共産党軍占領長沙	2
	大革命失敗後党在華北の地下闘争	1
	国共分別聯俄等問題	1
	国共關係	1
	牛蘭事件	1
	西安事変／西安事変善後	5
◆ 中ソ關係・中東路問題	中俄關係／中蘇關係／中蘇問題	13
	中東路事件／中国回収中東路／中東路問題／中東鐵路／中東路讓渡問題	7
	在蘇使館搜出の党案一部分	1
	蘇聯積極援助中国	1
	中日蘇關係	1
◆ 中国一般	天災與救済／賑災與借款／四川河南の飢荒	3
	中国黄河歴代變遷史	1
	有關中国的論著	1
	農業	1
	鉅山一般	1
	教育問題	1
	鴉片／禁煙工作	2
	塩務	1
	航空	2
	故宮盜宝案	1
	雲南境界問題	1
	印度事変	1
	白河港修建問題	1
	威海衛回収の交渉	1

中国・厦門大学図書館所蔵「末次資料」について（華）

		葫蘆島建港	1
		德国賠款償付問題	1
		外蒙古事情	1
		西藏	1
		考古	1
		華僑	1
		新疆	2
「日中関係」の部			
	区 分	標 題	冊数
◆	日中交渉	廢除二十一条／修改中日条約／中日条約廢棄	3
		青島問題	1
		日本対外貿易	1
		日本対外関係拾遺	1
		日本拡張政策	2
		日本政治経済／日本政治状況／日本経済政治状況	6
		中日交渉／中日関係／中日外交	8
		日本の文化事業	1
		日本侵略東北内蒙問題	2
		経済・商業	1
		上海事件（*1925）／因五卅惨案而発各地事件	5
		上海騒動和各国共同防備／上海共同警備拾遺	2
		漢口日本租界襲撃事件	1
		上海租界／上海外国租界	2
		上海事変／上海事件（*1931-32）	8
		日本出兵山東／濟南事件／濟南事件後の中日交渉	4
◆	満洲事変関連	満洲事変／九一八事変／満洲事変続編	27
		満洲事変與国際聯盟／九一八事変和国际聯盟／国際聯盟对華の援助	17
		溥儀称帝	1
		偽満情況／満洲政情／満州行政／偽満政情	7
		偽満辺界糾紛／満蒙間国境問題	3
		偽満対外関係	1
		偽満洲の建設情況／偽満洲海関接收／満州工農業／満洲の実業／偽満経済状況	4
		九一八事変前東三省諸鐵路／満鉄事情	3
		天津事件	1
		東北義勇軍／中国人民運動	2
		万宝山案和朝鮮の暴動	2

中国・厦門大学図書館所蔵「末次資料」について（華）

◆ 華北事変関連	華北事変／華北事件／華北自治事件	3	
	華北事情／華北情勢／華北情況／華北政情／華北形勢	17	
	華北特種貿易／中国の実業和日本	4	
◆ 蘆溝橋事変・日中戦争	蘆溝橋事変	1	
	通州事件	1	
	中日関係／中日事変	107	
	中日戦争和実業／中日事変和実業／中日事変和經濟	13	
	内蒙独立運動／内蒙的独立	2	
	内蒙事情	8	
	内蒙古政情	1	
	上海八一三抗戰	1	
	十九路軍反抗南京政府	2	
	国民政府の抗日準備	2	
	抗戰第一段階的国民党政府	3	
	南京国民政府の内政外交	1	
	華南抗戰局勢・日本侵占厦門	1	
	中国人民抗日運動／中国人民反日運動／人民救国戰線	4	
	英美对中国抗戰的態度	1	
	偽中央全会	1	
	侵華戦争中の日本／侵華戦争中日本の外交軍事財政經濟	2	
	在留邦人／日人被害和川越対華交渉／広東漢口日人事件	4	
	◆ その他	中外無線電管理問題／關係三井無線電の争執	2
		英日貿易協定	1
		日德防共協定	1
		日蘇關係／蘇日交渉／漁業問題	6
		張鼓峰事件	1
英日交渉／英日外交		3	
英美対日軍備		1	
非戦条件		1	
荷印和日本		1	
美日外交		1	
◆ 各時期の国際情勢		欧州／欧州政局／欧州拾遺	16
	欧戦後の戦債問題	1	
	太平洋會議	1	
	帝国主義間的矛盾	1	
	各国軍事	1	
	英国対華新政策の發表及其影響	1	
	海軍軍縮會議／日内瓦軍備會議	5	

	渥太華会議・世界経済会議	2
	関税会議	3
	阿比西ニア被侵事件	1
	美国的拡張	1
	美国的不景気	1
◆ 未分類	(文字不鮮明により十分に読み取れなかったもの)	62

### 三、採録された新聞紙の詳細

「末次資料」の切抜帳は専用台紙を使用していた。用紙最上部の欄外には「西暦〇〇年＝昭和〇〇年＝中華民国〇〇年」と当該切抜帳の作成年が記され、下部の左か右の縁には「末次研究所」の名称が印刷されている。また切り抜いた記事については、原紙名と日付が記されている。当初は手書きで記されていたが、1920年代の後半から次第にスタンプ式のものへと変わった。なお、記入された原紙名は当該新聞の正式名称とは限らず、しばしば略称も使用されていた。

『外編』の説明によれば、「末次資料」の採録対象となった新聞紙は「50余種」である<sup>⑤</sup>。ただそこに新聞紙名への具体的言及がないため、詳細は明らかになっていない。他方、筆者自身が確認できた新聞の数は現在49紙であるが、なかには略称にとどまり正式名称の判明に至らないものも含まれている（表二を参照）。なお、筆者の調査にも確認漏れの可能性があると思われるので、今後の進展にしたがって修正を加える所存である。

表二 「末次資料」採録紙名一覧表

中国語新聞の部			
	新聞名	略称	備考
1	順天時報	順天	日本外務省直轄紙、北京発行
2	大公報		天津発行
3	益世報	天・益世	天津発行
4	益世報	北益	北京発行
5	農報		北京発行
6	北平農報		北京発行
7	華北日報		北京発行
8	世界日報		
9	庸報		天津発行、後半日本傘下へ
10	黄報		北京発行
11	京報		北京発行
12	新民報	新民	
13	新興報		
14	亜洲民報		北京発行
15	冀東日報	冀東	河北発行、日本傘下
16	新聞報		上海発行
17	河北日報		
18	申報		上海発行
19	国民公報	国民	北京発行
20	黄鐘日報	黄鐘	
21	甲寅日刊	甲寅	北京発行
22	公言報	公言	北京発行
23	大国民報	大国民	
24	北京中華時報	中華	北京発行
25	亜細亜日報	亜細亜	北京発行
26		大陸	
27		経世	
28		北日	
29		亜東	
日本語新聞の部			
	新聞名	略称	備考
1	満洲日日新聞 (満洲日報)	満日	大連発行、満鉄機関紙
2	京津日日新聞	京津	天津発行 京津地方日本語新聞で最大
3	国民新報	国民	
4	東亜日報	東亜	ソウル発行
5	蒙疆新聞	蒙疆	張家口発行

6	新支那	新支	北京発行
7	北満日報	北満	長春発行
8	天津日報	天日	天津発行、天津日本居留民団機関紙
9	北京新聞	北京	北京発行、日本外務省補助
10	新京日報	新京	長春発行
11	時事日報	時事	
12	福岡日日新聞	福日	
13	東京朝日新聞	東朝	
14	大阪毎日新聞	大毎	
15	上海毎日新聞	上毎	上海発行
英字新聞の部			
	新聞名	略称	備考
1	North China Daily News	N.C.D.N	イギリス系 中文名字林西報、上海発行
2	North China Standard	N.C.S	日本外務省経営、順天時報の姉妹紙
3	Peking and Tientsin Times	P.T.T	イギリス系 中文名京津泰晤士報、天津発行
4	Peking Gazette	P.G	中文名北京時報、北京発行
5	Peking Daily News	P.D.N	中文名北京英文日報、北京発行

表二の採録新聞紙からうかがわれる「末次資料」の特色をあげてみる。

1. 当資料の採録対象紙はおもに中国現地で発行された各種新聞紙であり、とりわけ中国北方地域発行の主要紙を網羅的に採録していた。その点においては、日本国内紙を主体とする同時期の新聞切抜事業と明らかに採録範囲が異なり、当資料の重要な特色であるといえる。

2. 一口に中国現地発行紙といっても、採録された諸紙の性格は多様である。言語上でいえば、中国語、日本語・英語との三言語があり、経営陣の別では、日本系・中国系・イギリス系と大別される。日系諸紙の場合、満鉄機関紙の『満洲日日新聞』と、北京・天津で最大発行部数を有した『京津日日新聞』に加えて、外務省直轄の漢字紙『順天時報』と英字紙『North China Standard』が含まれ、さらに、日本傘下にあつて、日本の政治政策に同調する中国人経営紙もあった。当時複雑に形成されていた新聞輿論のありさまを如実に反映している。

3. 採録紙の最大グループをなす中国系新聞のなかでは、「大公報」「益世報」「晨报」などの有力紙が、当初から発行部数が多く、現在も比較的保存状況が良好で、近年のマイクロフィルム化によりその検索・利用も便利になっている。

しかし一方、「甲寅日刊」「公言報」「黄鐘日報」のような新聞紙は、20世紀初頭に一時発刊後に廃刊となったこともあって、その散逸が進み、所在の確認すら困難になっている。ということから、当資料に採録された1910年代から20年代の切り抜き記事は、当時の情報を知るための重要な手がかりになるだけではなく、中国近代新聞発達史の研究においても、貴重な資料源であるといえよう。

#### 四、『外編』と「末次資料」原本の比較

「末次資料」が厦門大学図書館に収蔵されて以来すでに半世紀以上の歳月が経過した。その間、所蔵先の厦門大学図書館が原本紙質の老化に憂慮し、整理出版を何度か試みたが、資金面の困難もあって実現に至らなかった。

その後1995年、中国国家教育委員会の後押しを受けて、当資料の影印出版が再び論議され、ようやくその企画が軌道に乗った。広西師範大学出版社と揚州邗江古籍印刷所が共同で資金を拠出し、編目と索引の作成は杭州大学図書館が担当した。複数の研究・出版機関の協力により、1997年、全巻210冊の大型影印本『外編』が刊行される運びとなった。

『外編』の出版によって、わざわざ原本の所蔵元へ出向かわなくても当資料の利用が可能になったことは、この分野の研究者にとって朗報であろう。また『外編』は、原本を全巻影印とし、切抜記事の内容に対して添削・修正のような加工を一切施さない方針を採用したことも評価できる。しかし一方、後者の編集者が影印本の構成に対して、原本のそれを一部改変して編集したりするなど、その軽率なやり方により、『外編』は原本の風貌を守れなかったばかりか、新聞切抜資料集としての機能まで一部損なってしまう、という不本意な結末を招いてしまった。

既述のように、原本の「末次資料」は作成時、事項別＋日付順の原則を徹底し、採録紙の言語を問わず、同一テーマの関連記事のすべてを日付の順に整理していた。その手法により、切抜資料の時空性と対照性が十分に生かされていた。これに対して影印本『外編』の区分基準は、切抜の言語別を最大原則とした。その結果、755冊の原本がタテに三本に分解され、「中文部分」100冊、「日

文部分」56冊、「英文部分」54冊という構成になった。同一言語の部分においては、切抜資料間の関連性と連続性が比較的に保たれたとはいえ、言語を異にする切抜記事間の本来の運動関係は引き裂かれて見えにくくなってしまった。

各言語部分における分類項目の作成にも問題がある。構成全般の改変にともない『外編』の分類項目も新たに作成されている。そこで、大分類としての46項目は各部分に共通して設けられているが、その下位の、より詳細な検索機能を有する記事の見出しの索引は、「中文部分」においてのみ作成されている。したがって、中国語切抜記事に対する検索の機能は原本に比べてある程度向上した反面、日本語や英語の膨大な切抜記事の検索には、大分類の46項目しか手がかりがないため、特定記事の割り出しに際してはむしろ手間取るようになった。

以上の理由により、『外編』を「末次資料」原本に代替可能なバージョンとみなすことはできない。今後も、研究のために原本との照合は必須であろう。しかしその原本は現在、劣化などもあって、ページをめくるだけでもダメージを受けてしまうほど危機的状況にあり、それがゆえに、原本の長期保存と研究利用の両面でその対策を早急に講じる必要がある。近年日本国内では、戦前・戦中期の資料集のデジタル化事業（デジタルアーカイブ）が多数行われている。中国厦門大学図書館に所蔵されている当資料にも、このようなチャンスが一日も早く訪れるよう、筆者は願っている。

#### 註

- ①『外務省記録』1門3類1項「宣伝関係雑件／囑託及補助金支給宣伝者其他宣伝費支出関係」
- ②『外務省記録』1門7類1項「対支借款関係雑件／北京政府ノ部第2巻」
- ③同前掲註①
- ④筆者と厦門大学図書館前副館長王忠俊氏との対談記録をもとに整理した。
- ⑤『中華民国史史料外編—前日本末次研究所情報資料』（広西師範大学出版社、1997年）の「編輯整理説明」による。

参考文献

1. 曾虚白『中国新聞史』、三民書局、1987年。
2. 中下正治『新聞にみる日中関係史』、研文出版、2000年。
3. 王忠俊「《日本末次研究所剪報資料》評析」、『福建図書館学刊』1992年第3期、69～71頁。
4. 章振乾「關於《末次情報資料》的來龍去脈」（写本、王忠俊氏提供）